

往生浄土

高尾剛一



浄土真宗の教えには、他力本願・悪人正機・往生浄土とありますが、そのなかで特に浄土に往生するという教えを話すことも聞くこともなくなっているように思われます。

それは、浄土という世界も、往生という言葉の意味を聴聞する機会が少ないことが原因ではないかと考えられます。そこで、今一度親鸞聖人の教えから往生浄土について聞いてみたいと思います。

往生とは、『浄土三経往生文類』に、「大経往生といふは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり、これすなはち念仏往生の願因によりて、必至滅土の願果をうるなり、現生に正定聚の位に住して、かならず眞実報土に至る。これは阿弥陀如来の往相回向の眞因なるがゆゑに、無上涅槃のさとりをひらく」とあり往生とは、現生に正定聚の位に住すること、命終のとき滅土に至ること、ふたつが示されています。

さてそれでは、正定聚とはどのような世界なのでしょう

か、
正信念仏偈には「譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」とあり、また、和讃には「眞実報土の正因を 二尊のみことにたまはりて 正定聚に住すれば かならず滅土をささるなり」「無碍光の利益より 威徳広大の信を得て かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみずとなる」「眞実信心うるひとはすなはち定聚のかずにいる 不退のくらしにりぬればかならず滅土にいたらしむ」「眞実信心うるゆへにす

なはち定聚にいりぬれば 補処の弥勒におなじくして 無上覺をささるなり」とある。
親鸞聖人の思われた現生正定聚とは、無明の闇が破られて少し明かりがさして来た世界ではないかと思えます。

正定聚にいたるには、『証文類』に、「しかるに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即のとき大乘正定聚の数に入るなり、正定聚に住するがゆゑにかならず滅度に至る。」(往相回向の心行は、佛より回向された信心と称名のこと)

親鸞聖人お木像



龜山本徳寺所蔵・内道場安置

また、唯信鈔文意に、「大経(下)願生彼国 即得往生 住不退転とのたまへり、願生彼国は、かのくににうまれんとねがへとなり、即得往生は、信心をうればすなはち往生すという、すなはち往生すといふは、不退転に住するをいふ。不退転に住すといふは、すなはち正定聚の位に定まるとのたまふ御のりなり、これを即得往生とは申すなり。」

御文章・五帖目五通に「信心獲得すといふは、第十八の願をこころうるなり。この願をこころうるといふは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。このゆゑに南無

と歸命する一念の處に發願回向のこころあるべし。これすなはち弥陀如来の凡夫に回向しますところなり。これを「大経」には「令諸衆生功德成就」と説けり。されば無始以來つくりとつくる悪業煩惱を、のこるところもなく願力不思議をもって消滅するいはれあるがゆゑに、正定聚不退の位に住すとなり。これによりて「煩惱を断ぜずして涅槃をう」といへるはこのこころなり・・・」
正定聚に至るには、仏より賜った信心と称名「南無阿弥陀仏」を念仏することで、仏の眞実信心を獲ることです。

正定聚の利益とは、『信文類』に、「金剛の眞心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにものか十とする。一に眞衆護持、二に至徳具足、三に転悪成善、四に諸仏護念、五に諸仏稱讃、六に心光常護、七に心多歡喜、八に知恩報徳、九に常行大悲、十に正定聚に入る益なり」とあり、正定聚の利益とは、十種の益に収まる無量の徳を獲ることです。

滅土に至ること
命終のち必ず極楽浄土に往生することが決定しているということだ。

私は、往生浄土について次のように領解いたしました。浄土に往生するということは決して死んでからのことではなくて、如来の眞実信心を頂いた時、眞如の法に照らされて自己中心で地獄一定の私が明らかになり、その私が正定聚の位に住して現生に十種の益を得ることができ、無碍の一道を歩ませて頂くことなるのであります。しかし、現実の生活においては、あいかわらず煩惱もこり悪業に明け暮れる毎日の生活に変わりありませんが、如来の光明のはたらきは変わるものではなく雲や霧が空一面を覆っていても、太陽の光によつて雲や霧の下が明るいのとつじように照らし続けられています。本願他力の導きによつて毎日の日暮を浄土に向けて歩ませて頂きたいとおもっています。

それでは皆様とご一緒に念仏申しませう。
南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏・・・合掌

